

# 設計者は積極的に海外に出よう！

## 海外では語学力より機転と知恵の「語術力」が活きる！

細川 清和（建築家）



細川清和（ほそかわ きよかず）

1943年生まれ。1962年浦和高校卒業。1967年東京芸術大学建築科卒業（1965年匠美賞）。1967年JCP入社・クエート勤務。1969年大林組入社。1978年米国ジョージア工科大学修士課程修了（同年米国ヘンリー・アダムス AIA ゴールドメダル受賞）。1990年大林組東京本社設計部部長。1999年大林組理事。2003年定年退職・アイデック東京設立。2004年上海アイデック設立し現在に至る。2002～2007年東京芸術大学建築科非常勤講師。2004～大連理工大学出版部・雑誌「DETAIL」海外編集委員。2006年～当代中国建築論壇特任委員。「クエート大学理学部新館」（JCP時代、以下は大林組時代）、「名古屋東急ホテル」（1988年BCS賞）、「三和銀行軽井沢保養所」（1989年東京建築賞）、「三和銀行千葉センター」（1996年）「NEC 那須リゾート」（1997年東京建築賞）、「NEC 玉川ルネッサンスシティ」（2000年BCS賞・日建設計、大林組共同設計）、「電通本社ビル」（2002年BCS賞、グッドデザイン金賞）他。

### 手描きスケッチ・詳細は最強のコミュニケーションツール

私は時々定年を間近にした後輩たちから、退職後の身の振り方について相談を受けることがある。そんなとき私は、日本は人材倉庫で過当競争の社会だから、作品をつくるチャンスがある海外で自らの技術を活かすことを勧めるようにしている。ところが、後輩が心配するのはまず語学力不足である。私は大学卒業後、海外で設計したり留学したり、海外から日本に来た建築家と英語を使って協働設計をしてきたが、いまだに英語で上手にコミュニケーションできるような語学力は備わっていない。しかし、それでも留学や設計の実務は過不足なくこなしてきた。定年まで勤務した大林組本社設計部における私の部は国内プロジェクトが担当で、海外プロジェクトはAIAのライセンスを持ち英語力の優れた部長が担当していた。

私は若い人も定年後のシニアも、日本人は語学のハンディにおじけづくことなく、もっと積極的に海外に出て活動するべきだと思っている。海外で活動するうえで必要なものは語学力よりも「語術力」という語学力不足を補う機転と知恵であり、度胸と交渉力であるというのが私の持論だ。しかし、そうはいても、そうした能力が一朝一夕に私の身についたわけではない。本稿では、私の海外での英語や中国語にまつわる経験を書いてみたいと思う。大した経験ではないが、語学力不足をさまざまな工夫でカバーしてきた経験談である。自慢できる話もあるが、むしろ失敗した苦労話の方が多い。

海外に出るか出ないか迷ったときは、まずは出てしまう方がよい。軽はずみかもしれないが、未知のものに対する好奇心を持っているなら、2階に登って自ら梯子を外してしまう方が人生は面白くなる。若い人達は失敗してもそれを肥やしに進歩する時間を持っているし、CADやPCのような国際的ツールを身につけている。我々シニア世代はCADやPCは使いこなせないが、手描きでスケッチや詳細図を描ける。この能力は言語によるコミュニケーションをはるかに超えて、正確にこちらの意図を相手に伝えることができる優れた能力である。言葉の障壁を取り除けば、日本のシニア設計者の能力は世界的にも高いのだ。なにも恐れることはない。

## 心もとないListening能力が幸いとなることもある

私は大学卒業後、アルバイト先の先輩の設計事務所に入り、そこで担当したクウェート大学理学部新館の設計コンペで1等になり、1967（昭和42）年から2年間、提携先のクウェートの設計事務所に赴任して実施設計をした。隣の部屋はクウェート国際空港を設計している丹下健三事務所の分室であった。クウェートではイギリス方式で設計図書を作成していた。その事務所にイギリス人のQuantity Surveyor（積算・見積・特記仕様書作成者）がいて、自分の推薦するメーカー（リベートの多い）の材料を使えとデザインに口を出してくる。ラグビーで体を鍛えている男で、アラブ人や東洋人を見下しているのか高飛車な口のききかたをしていた。

ある日、設計チームの全体会議の席で、いつものように私たちのデザインにケチをつけてきた。そういうこともあるかと前もって反撃の言葉は用意していたが、いざ反撃してみるとその男の顔がみるみる赤くなって、そのあともすごい剣幕で私に罵詈雑言を浴びせかけてきた。ところがそうになると、こちらはなにを言われているかまったくわからないから、けっこう冷静に対応することができた。

話が終わったとき私は、  
「意見は後で書面にして提出してください」

と締めくくって会議を終わり、その後提出された書類を見て、ああこういう事を言いたかったのかと理解した。

ところが、会議に出席していたアラブ人のエンジニア達が私の部屋に来て、

「あんたは若いのに凄い！ あれだけ言われたのに顔色ひとつ変えず、平然とあいつの目を見ていた！」

と褒められ、男をあげた。

英語のListening能力が高ければ、私は恐らくビビってみっともないことになっただろうが、これは馬耳東風というか語学力のないことの強み？であろう。私はクウェート時代、英語での表現がうまくできなかったから、大切なときは“ジェロニモの英語”を話すように心がけていた。

西部劇出てくるアパッチ族のジェロニモ酋長は、  
「わたし……インディアン酋長……ジェロニモ！ 白人……嘘つく！」

とゆっくりトツトツと話すがかえって威厳がある。ベラベラ饒舌に喋りまくるより余程賢く聞こえるからだ。

英語力を工夫でカバーする一例だが、当時クウェートに駐在していたある日本人が、英語力はそれ程でもないのに立派に過去形、未来形を言い分けているのを見て感心したことがある。その人は昨日のことを話すのに、まず「Yesterday！」と前置きし、後は全部現在形で話し、明日のことは最初に「Tomorrow！」と前置きし、後は全部現在形で話す、相手には十分通じていた。



クウェート大学理学部



クウェート大学理学部 実験棟

## 設計者も施工現場での経験が定年後に生きることがある

クウェートでの仕事を終えたとき、現地での設計図は完成できたものの、自分の設計力不足を実感した。もう一度勉強し直すには大きな設計組織がよいと思い、先輩が多く在籍していた大林組に再就職した。設計を勉強したくて就職したのだが、ゼネコンに入った以上、一度は現場員として施工現場を体験したいと希望を述べたところ、それはよい心掛けだと褒められ、暫く工務部で待機させてもらいながら勉強した。暫くすると「日生新橋ビル」の現場が始まるというので、既存建物解体から竣工まで、現場員として常駐し施工係りのかたわら施工図を全部書かせてもらった。

定年後に私が中国で工事監理の仕事が続けられてきたのは、この3年間の現場経験のお陰である。先輩達は惜しみなくなんでも教えてくれた。この現場で、テナントに入るドイツの製薬会社の工事を契約書なしに行ってしまう、それが問題になったときの出来高は600万円だった。事務主任が以前、米軍の工事を契約書なしに行い工事代金を払ってもらえなかった経験を持っていたから所長は青くなった。細川は英語ができると誰かから聞いた所長から私は、いくらでもよいから工事代金をもらう交渉をするよう一任された。先方の会社に行き、信用取引という日本の商習慣を説明したところ、無事全額払ってもらうことができた。

現場から設計部に配属されて最初の仕事は、宮崎君治主査がチーフで取り組んだタンザニア国会議事堂の国際コンペの手伝いだった。最優秀賞は黒川紀章案で、大林組案は2位だった。表彰式にタンザニア大使館に行き大使の祝辞を

伺った後、宮崎主査が大使にお礼の言葉を述べるから私に通訳しろと突然言いだした。英字新聞の記者が数人来ているので、下手な英語で冷や汗ものの通訳だったが、私は大使から「Good Translation！」と褒められホッとした。

このコンペの審査員の1人が芦原義信氏で、聞くところによると芦原氏は、審査のときに大林組案は日本人の作品だとわかっていたそうだ。LobbyのスペルがRobbyとなっていたからだが、LとRの違いなどJapanese Englishにはないのだ。

## 特技があれば海外にいても評価される

30歳を過ぎたとき、会社を退職して米国のジョージア工科大学（Georgia Institute of Technology：GT）に私費留学した。アメリカ南部の工科大系名門校だが、ゴルフでグラウンドスラムを達成したボビー・ジョーンズが卒業した大学でもありスポーツも強い。オイルショックで会社の留学制度は休止となっていたが、会社が私費留学のための退職制度を新たに作ってくれたので、退職する必要はなかった。ジョージア工科大学大学院に留学できたのは、結婚前にジョージア大学を卒業していた妻の協力と、妻の留学を親代わりとなって支援して下さったジョージア州に農場を持つセガーズ（Segars）夫妻のお陰であった。

私のTOFELの点数は514点で、州立大学に入学できる最低の550点にははるかにおよばなかったが、入学前に2カ月間の短期集中英語講座を受け、講座の終了時に行われたミシガンテストで最低及第点の80点をわずかに超える82点



砂漠でパンクしたタイヤをベドウィン族が黙って取り替えてくれた



イラク「サマラの塔」登ったが怖くて降りられず後悔した



鐘楼から見たイラン・イスファハンの市街

が取れたので、かろうじて入学許可となった。この短期講座はほとんどの留学生が受講していたが、ラテンアメリカなどアルファベットを使っている国の学生は、アルファベットを読み書きするスピードが早く太刀打ちできなかった。しかし文法のテストでは私が常にトップだった。受験英語のお陰である。

ジョージア工科大学大学院に入学した最初の学期の初め頃は、私にはクラスに友達がいなかった。会話力不足のせいか出来の悪い留学生と思われたようで、クラスではなんとなく外れていることがわかった。アメリカ人の学生はけっこうゲンキンで、成績の悪い留学生なんかは相手にしてくれない。友達のいない大学なんて留学の意味が薄れる。

そこで、一案を講じた。私はけっこう絵が描けたから、ある講座のグループワークのとき、アトランタの街の鳥瞰パースを、目に付く場所に陣取ってA1の用紙にフリーハンドでバンバン描いて見せた。たちまち学生達が集まってきて、「どうすればフリーハンドでパースが描けるんだ？ ぜひ教えてくれ！」

と注目を集め、その後は話のできる友達が増えていった。グループワークの講評時にそのパースを教授が褒めたから、それからは、なんとなくクラスメイトから一目置かれるようになった。

1学期目のデザインはAIAの学生デザインコンペを課題としたものであったが、そのコンペで私は2位になった。AIAの表彰式は年末のバンケットで、案内状にBLACK TIE BANQUETと書いてあったが、意味が分からずスーツにネクタイを締めて行くと、全員黒い蝶ネクタイの正装だったので女房に叱られた。しかし、頂いた賞金はその後大いに役立

ったし、それ以来、クラスでの居心地はさらによくなった。

クラスにベトナム戦争中ファントム戦闘機に乗って北爆の中隊長をしていた、私と同歳の海軍中尉の男がいた。復員後に海軍は予備役になり、建築家を目指してGTの大学院に入学してきた。彼は学科の成績はよかったが、肝心のデザインが弱かった。デザインの点数が悪いと建築学部は卒業できない。彼とは気が合ったから、得意科目をトレードして卒業まで助け合った。授業は全部同じ授業を取り、彼がノートを取って私はそれを写す。私のレポートの英語は彼がチェックする。代わりに私はデザインの課題では2つの案を考える。1つは彼の作品となる。彼の希望はデザインでBを取ることであったので、彼の案を考えることは私には“お茶の子さいさい”だった。こういった得意科目の相互補完をTrade（交換）と言うが、学生の間ではよく行われていた。

私は卒業までデザインはすべて「A」で、課題の制作では余裕があった。苦手はレポート作文とタイプ打ちだった。当時は電動タイプが主流だったが、ちょっとキーに触れただけでバチーンと打ってしまうから、ミスタイプの修正の方に時間がかかってなかなか進まない。そこで、コンペでもらったお金を使い、事務課の女の子にアルバイトでタイプ打ちをしてもらった。タイプを打ちながら私の英語がおかしいと彼女が直してくれたり、時には上手な英文に書き直してくれたから、レポートは楽になりいつも「A」が取れたが、私の英作文能力は進歩しなかった。しかしその後、ティーチングアシスタントになり大学からの給料が入ったり、学生の住宅設計コンペで1位になり賞金が入ったから、こうした外注費？には困らなかった。（つづく）



ジョージア工科大学 シンボル校舎



ジョージア工科大学 大学院スタジオ



AIA SGF コンペ2等案

# 知恵を使えばなんとかなるもんだ！

海外では交渉力と度胸で勝負しよう！

細川 清和（建築家）



細川清和（ほそかわ きよかず）

1943年生まれ。1962年浦和高校卒業。1967年東京芸術大学建築科卒業（1965年匠美賞）。1967年JCP入社・クエート勤務。1969年大林組入社。1978年米国ジョージア工科大学修士課程修了（同年米国ヘンリー・アダムス AIA ゴールドメダル受賞）。1990年大林組東京本社設計部部長。1999年大林組理事。2003年定年退職・アイデック東京設立。2004年上海アイデック設立し現在に至る。2002～2007年東京芸術大学建築科非常勤講師。2004～大連理工大学出版部・雑誌「DETAIL」海外編集委員。2006年～当代中国建築論壇特任委員。「クエート大学理学部新館」（JCP時代、以下は大林組時代）、「名古屋東急ホテル」（1988年BCS賞）、「三和銀行軽井沢保養所」（1989年東京建築賞）、「三和銀行千葉センター」（1996年）「NEC 那須リゾート」（1997年東京建築賞）、「NEC 玉川ルネッサンスステイ」（2000年BCS賞・日建設計、大林組共同設計）、「電通本社ビル」（2002年BCS賞、グッドデザイン金賞）他。

## 交渉力があれば英語力の壁は乗り越えられる

米国ジョージア工科大学（GT）への留学時代にお世話になったGlenn Segars氏は、当時ジョージア州の現職の農務省副長官であり、ジョージア州と鹿児島県の姉妹県関係樹立に尽力された親日家でもあった。私は有り金をはたいて私費留学したのだから、いい加減な成績では終わりたくなかった。Segars氏からアメリカの大学を良い成績で卒業するためには、履修スケジュールの作戦づくりが大切だとアドバイスをいただいた。そこで履修届けを出す前に、建築学部の副学部長から優秀な卒業生を1人紹介していただき、その卒業生から各教授の性格、点数の厳しさや甘さ、宿題やテストの傾向をヒアリングして、履修スケジュールをつくり、最初の学期は優しく点数の甘い教授の講座を取るようにした。

しかし、私はすぐに英語力の壁に突き当たった。選択科目の都市計画講座だったが、1学期間（Quarter:3カ月）でルイス・マンフォードの「歴史の都市、明日の都市」を最初の章から最後の章まで読みながら授業をする。やたらと分厚い本で、読むのだけで1カ月はかかるだろう。そこで、すぐに日本にいる友人に邦訳本を送ってもらったが、これがまた輪をかけてめちゃくちゃ分厚い。斜め読みしても2～3週間はかかりそうだ。

この講座は3単位で1学期に15単位取る計画だから、こんな本を真面目に読んでいる時間などない。学期の開始から2週間以内に履修届けを撤回すれば成績はつかないが、そのまま授業に出ていると点数がついてしまう。大学院は平均でBくらいの成績以上でないと卒業できないから「C」になったりすれば大変だ。しかしSegars氏から、アメリカはネゴ社会だから何事も交渉だ、と彼の大学時代の経験談も聞いていたから、恐る恐るその教授の部屋に相談に行くことにした。その教授は優しい人で、「アメリカ人の学生は言葉は分かるが寝ているから授業が分からない。君は起きているが言葉が分からないから授業が分からない。授業が分からないことには変わらないから、最後まで授業に出なさい。点数にはハンディをあげるよ」と言ってくれた。

ほかに必須科目の現代建築論という講座も取った。時々

ペーパーテストをするのだが、私の答案用紙は赤のバッテンだらけである。答えの内容は合っているが英語のスペルが間違いだらけだ。人名、地名、プロジェクト名は英語綴りだったりフランス語綴りだったりするから、カタカナで外国語を覚えている私には、もうこれは語学テスト以外の何ものでもなかった。

思案に暮れていると、チャンスが偶然やってきた。授業で日本建築界の紹介のときにメタボリズムが紹介されたのだが、担当教授が建築家の岡田新一氏をメタボリストとして紹介した。もちろんこれは間違いである。早速、授業の後で教授室を訪ね、岡田新一氏はメタボリストではないことを説明すると教授は真っ青になった。それからあれこれ話し合った結果、これからは日本の建築情報を私が教授に提供する代わりに、私のペーパーテストは読んでみて、おおよその音が合っていたら正解にしてもらうことで交渉が成立した。

その教授も、かつてパリのエコール・デ・ボザールに留学したときに似たような経験をしたそうだ。それから大学の図書館に日本の建築雑誌を全部購読するように交渉し、せっせと建築雑誌の最新情報を教授に提供したので、現代建築論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの科目はすべて「A」をいただいた。

我々の世代は高校まで習う英語は完全に受験英語で、いまのようなListeningなどは習っていない。しかも、ただでさえ聞いても分からないのに、声の小さな教授の話はよけいに分からない。とくに子音が聞き取りにくいので、最初の学期はいちばん教壇に近い席に座っていた。他の学生は

教室の3列目くらいから座るから、私だけが突出して前に座っている格好になる。

後で分かったことだが、クラスメイトや教授は私が難聴だと思っていたようだ。また、クラスメイトが冗談を言い合って大笑いしていても、私には英語の冗談が分からないから笑えない。皆は私が真面目で冗談の嫌いな人間だと思っていたようで、たしかに私のいる席のまわりではあまり冗談を言わなかった。

### 米国の合理主義と単純明瞭な話し方

ジョージア工科大学（GT）で大学院1年が終了したとき、副学部長からティーチング・アシスタント（Teaching Assistant = TA：教育助手）のオファーがあった。ティーチング・アシスタントは一種の奨学金制度で、GTでは大学院1年時の成績が1、2番の学生にTAのオファーがある。時給が他のアルバイトより高く、大学の教職員施設が使えたり、大学構内のショップでの割引を受けられ本や教材が安く買えたりするメリットがあった。最初は「私は英語に自信がないから……」と言って辞退したが、「英語を教えるわけではない。良い経験になるから教えてみては……」と言う副学部長に背中を押され、私は引き受けることにした。

ところが、TAを引き受けてしばらくすると、成績が3番の学生が私のブースに来て、私にTAを辞退してくれと言ってきた。



ジョージア工科大学 現代建築論のテスト風景。私はいち早く答案用紙を提出し、教授の許可をいただいて写真を撮った。



ジョージア工科大学 大学院デザインスタジオ。真冬でも24時間暖房がきいていて、学生は泊まり込みで課題を制作した。

「僕はジョージア州の住民だから、留学生の君よりも州立大のTAになる資格があるはずだ。それに、生活は君よりも厳しく金が必要なんだ」

と彼は主張した。私が、せっかくチャンスをいただいたのだから降りるつもりはないと言うと、それでは学部長に直訴すると言って帰っていった。

その後、学部長にあったときその学生がこの件で直訴しに行ったかを訊ねたところ、たしかに直訴に来たという。学部長がどんな対応をされたのかを伺ったところ、

「ジョージア州の税金を教育目的に使うとき、州の住民に渡す方が州のためになるか、留学生に渡す方が州のためになるかを判断するのは私の役目だ。この場合は留学生に渡す方が州のためになる」

と答えたそうだ。典型的なアメリカ人の合理主義的な理由付けであり、単純明瞭な説明の仕方である。以来、私はこういう単純明瞭な話を、アメリカ人に対する話し方の手本にしている。

### 米国人学生の世話をするうちにコンプレックスが解消

私が1年間教えたのは学部2年生のデザインのクラスであった。ほとんどはデザインスタジオでの課題制作の指導だが、ときたま教壇に立って講義することもあった。私が話すことはクラス全員が理解するが、問題は質問を受けたときで、流暢な英語で早口に質問されると質問の内容が理解

できない。そういう場合に助け舟を出してくれたのが学部留学生だった。

学部留学生の英語力は、大学院留学生の英語力よりレベルが高い。彼らは英語力上達の過程でいちどは私の英語力のレベルを通過しているから、私がなぜ流暢な英語の質問が理解できないかが分かる。そんなときは、彼らが私に理解できる英語の文型に翻訳して言い直してくれたので大助かりだった。

私の英語力不足が授業に差し障りがないかと一安心していると、1人の学生がクラスを替えたいと言ってきた。その学生は聴覚障害を持っていて、Lip Readingといって相手の唇の動きを読むことで聞いているそうだが、私の唇は読唇すると英語にはなっていなかったらしい。

そのデザインのクラスに、いつも1人だけ課題の提出が遅くなる学生がいて、学期最後の課題も期限内に提出してこなかった。他の学生にその学生の消息を聞くと、生活費のためガソリンスタンドでアルバイトしていること言う。そこでガソリンスタンドに行き、

「この課題を提出しないと君は3年生に進級できないし、卒業の見込みが立たず退学することになるかも知れない。数日待つから課題を提出したらどうか」

と勧めたところ、彼は

「必ず提出しますから待って下さい」

と返答した。しかし、その後またもや期限までに提出がなく、私は彼に「F」(Failure: 不可、零点)をつけなければならなくなった。



ジョージア工科大学 私の教えた学部2年デザインクラスの課題制作風景。日本の学生より真面目だった。



ジョージア工科大学 学園祭で教員のカントリーバンド。以来、私はカントリーミュージックのファンである。

彼は私のつけるFで退学することになるかも知れないし、その後の人生の歯車も大きく狂うことになるかも知れない。そう悩んだ私は学部長のところに相談に行った。すると学部長は、

「アメリカの大学では大学入学時に学生は、卒業まで大学の要求するレベル以上の成績を維持するという契約を大学と結んでいる。この場合は学生が一方向的にその契約を破ったのだから、成績は当然Fである」

と、またもや合理主義的で明解な返答をくれたので、私は自信を持ってFをつけ、その学生は転校していった。

アメリカの大学には、レベルの高い大学で退学になる前にレベルの低い大学に転校できる制度があった。その逆にレベルの低い大学で頑張りレベルの高い大学に転校もできる。アメリカ人の学生は日本の学生より自分の成績を気にしている。大学は就職斡旋をしないし、教授は成績の悪い学生には推薦状を書かないから点数は大事だ。AとB、BとC、CとDの境界にいる学生は、学期末になると成績の相談に来る。Dを取ると進級は厳しくなるので皆真剣だ。私は成績を上げたい学生には、課題を手直しして再提出する猶予を与え、良い点を取れるように指導していた。

こうしてアメリカ人学生の相談に乗ったり成績の点数をつけたりした結果、それまで自分の潜在意識の中にあった外人コンプレックスが解消されていくのを感じた。

私の世代が初めて接した外人は進駐軍のアメリカ兵で、圧倒的な体格差と生活レベルの違いを見せつけられた時から、アメリカ人に対する劣等感が私の意識下でトラウマになっていたのだろう。

### 中学生レベルの平易な英文でも十分通用する

2年目の夏休みに、妻と子ども2人を連れて、日本で知り合った元サーリネン事務所の友人が住むニューヨーク州のオルバニーまで車で旅行した。途中、ワシントンDCに建設中だったI・M・ペイ設計のナショナル・ギャラリー・オブ・アートの現場を見学させてもらった。私は日本のコンクリート打ち技術は世界最高だと思っていたが、この現場の型枠とコンクリート打ちを見て驚いた。型枠は家具職人が作っていて精度が高く丈夫で、パイプレーターにもビクとも

しなかった。上には上がいるものだ。

見学許可を得るためI・M・ペイに手紙を書いたのだが、英文が心配なので友人に見てもらった。友人が自分より奥さんの方が文章力があると言うので、彼の奥さんに見てもらおうと、自分の姉は英語の教師だからお姉さんに見てもらえと薦める。そのお姉さんに私の書いた文章を添削してもらったところ、極めて平易な中学生でも読めるような文章になった。アメリカは移民国家で、昨日市民権を取った英語力のない国民もいるから大統領のスピーチも平易である。敬語や難しい言い回しを駆使しなくても、失礼のない英語の手紙が書けることをこのときに学んだ。

普段の英会話は半分以上相手の言うことが理解できれば、あとはなんとかなるものだが、100%理解できていないといけな場面もある。移民局、税務署、警察、病院などでの会話には知恵と工夫が必要だ。いちど大学構内で駐車違反の罰金20ドルを取られたことがある。警官が罰金を徴収するときに「あなたには不服申立の権利がある」と言うので、社会勉強のつもりで簡易裁判を受けた。判事が言う事が100%理解できないときは、私の英語で判事の言った内容を復唱し、私の英語力レベルでの質疑に持ち込んだ。私の言い分が通り、判事が木槌でドンと机を叩き、

「Dismissed！（却下・無罪！）」

と言ったとき、私は緊張で汗だくになっていた。もちろん20ドルは無事私に返却された。

私のアメリカ留学での収穫は、主席で卒業してヘンリー・アダムスAIAメダルを受賞できたこともさることながら、英語の世界に場慣れし、外国人と話すときの度胸がついたことである。帰国後すぐデルケラーのハワイ事務所の仕事したときも、東京でアメリカ大使館館員宿舎の実施設計をハリー・ウィーズ&アソシエイツと協働で行ったときも、電通本社の設計をジョン・ジャーディヤジャン・ヌーヴェルと協働でしたときも、英語力よりこの場慣れと度胸の方が役に立ったと思う。（つづく）



ヘンリー・アダムスAIAゴールドメダル



# 定年後は海外に出よう

## 中国ではシニアだからこそその出番も

細川 清和（建築家）



細川清和（ほそかわ きよかず）

1943年生まれ。1962年浦和高校卒業。1967年東京芸術大学建築科卒業（1965年匠美賞）。1967年JCP入社・クエート勤務。1969年大林組入社。1978年米国ジョージア工科大学修士課程修了（同年米国ヘンリー・アダムス AIA ゴールドメダル受賞）。1990年大林組東京本社設計部部長。1999年大林組理事。2003年定年退職・アイデック東京設立。2004年上海アイデック設立し現在に至る。2002～2007年東京芸術大学建築科非常勤講師。2004～大連理工大学出版部・雑誌「DETAIL」海外編集委員。2006年～当代中国建築論壇特任委員。主な作品：「クエート大学理学部新館」（JCP時代、以下は大林組時代）、「名古屋東急ホテル」（1988年BCS賞）、「三和銀行軽井沢保養所」（1989年東京建築賞）、「三和銀行千葉センター」（1996年）「NEC那須リゾート」（1997年東京建築賞）、「NEC玉川ルネッサンスシティ」（2000年BCS賞・日建設計、大林組共同設計）、「電通本社ビル」（2002年BCS賞、グッドデザイン金賞）他。

### 電通本社ビルでJ.ヌーヴェルとJ.ジャーディが親友に

大林組設計部での最後のビッグプロジェクトは、東京港区東新橋の電通本社ビル（2002年竣工）の設計・監理であった。私が設計責任者で、高層棟デザインはデザイン・パートナーとしてフランスのジャン・ヌーヴェル（Jean Nouvel）を起用し協働、低層棟デザインはアメリカのジョン・ジャーディ（Jon Jerde）との協働であった。高層棟デザイン・パートナーは国内外の建築家20名を選んで電通チームと書類審査し、最終候補に残ったレンゾ・ピアノ（Renzo Piano）、ジャン・ヌーヴェル、コーン・ペダーセン・フォックス（KPF）の3社を電通の担当者の盛部長と一緒に訪問し、有償コンペを行う旨を説明した。結果はアトリエ・ジャン・ヌーヴェル（AJN）の提案が一番優れていた。AJNの日本初仕事であったから、フランス流儀の仕事の仕方との違いを十分に考慮して、慎重に設計契約交渉を進めた。

プロジェクトのスタートの段階で、ジャン・ヌーヴェルとの話し合いは、フランス育ちで折り紙付きの語学力を持つ私の部下の横堀君に仏語の通訳をしてもらっていたが、ある日、ヌーヴェルと意見の相違があって、そのうち激しい論戦になった。ラテン系のヌーヴェルは結構エキサイトする。激しい感情的表現をしているようで、ついに横堀君が「私はもう通訳できません。後は部長が直にやってください」と音を上げてしまった。そこで仕方なく2人は共に外国語である英語で話し合う嵌めになった。

ヌーヴェルは英語がかなり上手だが、しかしそれでも仏語のように感情表現ができないようで、話は次第に論理的になった。論理的に表現すればいいだけなら、英語はそれほど難しくない。ヌーヴェルもかなり落ち着いて冷静になり、私の言い分も通じたようで、その内に話に折り合いがついた。英語力が高くない者同士の話し合いには、感情表現を回避して論理的に会話ができるメリットもあるのだ。

そもそもこの論戦は、ジャーディ建築に対する評価が違うことが発端だった。ヌーヴェルの建築に対する定義はかなり狭く、私の定義はかなり広がった。彼らに互に敬意をもって仲良く仕事をしてもらうためには、基本認識を一致させておく必要がある。私の流儀が一番言いにくいことは最初に言っておき、そのために起きる論争は厭わないやり

方である。途中でボタンの掛け違いに気づき、そこで修正する方がよほど大変だからだ。

しかし、その後思わぬことから二人は親友の間柄になった。親友になった最初の契機は、私と3人で食事をしたときだ。ヌーヴェルが今の奥さんは4人目だと言うと、ジャーディも4人目だという。しかも2人共、昔の奥さんや子どもたちの面倒を見ているし、結構良い関係を維持しているという。その内に2人は男として認め合って打ち解けてきた。この2人から細川は何人目の奥さんだ聞かれたとき、1人目のままの私はどういうわけか肩身が狭かった。

次の契機は2人に共通の親友がいたことである。フランク・ゲーリー（Frank Gehry）だ。ゲーリーの取りなしが、ロスアンゼルスでジャーディ事務所デザインセッションをした頃には2人は親友になっていた。ゲーリーがヌーヴェル歓迎の一席設けてくれた。私はゲーリーの車に同乗してレストランに行ったが、後部座席はグラントホッカーの道具やステックで一杯だった。60歳代半ばのゲーリーがホッカーをして走り廻っているなんて想像外だった。当時、アメリカ建築業界はすでに不況だったので、ゲーリーに仕事はまだあるかと聞くと、「俺は直線のデザインをしない限り仕事はいくらでもある……」と剽軽な答えが返ってきた。

電通本社ビルの竣工式ではヌーヴェルとジャーディに“鋤鍬の儀”を執り行ってもらうことになった。日本の神道を説明したときに「八百万の神」をGodsと訳したから、キリスト教の彼等から神が800万もいる訳はないだろうと抗議され、Spiritsと訂正して理解を得た。式典が始まる前に神

主に立ち会ってもらってリハーサルを行い、二礼、二拍手、一礼も上手にできた。

### 文革で中国は経験豊かなシニア層が不足している

私の定年後は思いもよらず中国で仕事をするようになった。上海に事務所を置いてから早くも10年が過ぎた。キッカケは現役時代に部下だった中国人建築家から、定年間際に現地の超高層オフィスの設計・監修を依頼されたことであった。その後、一時は自分の事務所で設計スタッフを雇って設計の仕事もしてみたが、中国での事務所維持には常駐する必要があり、それはとても無理なので、今では1人でコンサルティングの仕事をしている。

中国での仕事は、日系中小企業の工場やオフィスビルの設計・監理、あるいは中国設計事務所やデベロッパーへのアドバイスなどであったが、常に日本に留学経験のある中国人と連携して仕事をしてきたので、中国語のできない私でも特に言葉の問題は感じなかった。大学での講義は商社員の友人や私の事務所の秘書が通訳してくれる。設計の打ち合わせでは話す代わりにスケッチを描いた。補足説明は漢字を書いてもいいし、若い人になら英単語でも意味は理解してもらえる。

尖閣問題以来、日中政府間の関係はギクシャクしているが、我々設計者の世界には直接的影響はなかった。工事現場に行っても、現場の作業員は皆私が日本人であることを



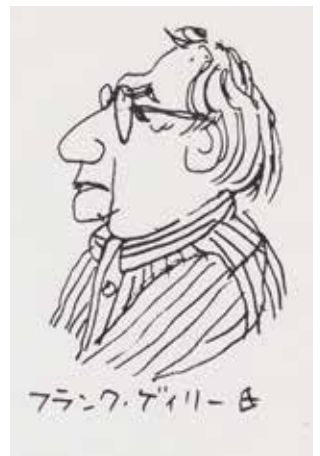
電通本社ビル



上/J. ヌーヴェルとパリのアラブ研究所前で 下/大林組の私の席で私の物真似をするJ. ヌーヴェル



上/ロスアンゼルスでJ. ヌーヴェル、J. ジャーディとデザインセッション 下/ロスアンゼルスでフランク・ゲーリー、J. ヌーヴェルとの会食



会食時に私が描いたF.ゲーリーの似顔絵。ジャーディが絶賛してくれた

知っているが、お互いに協力関係にあるから友好的で、これまで反日的理由で嫌がらせを受けたことは一度もない。

少しでも日中友好のためになればと、ボランティアでも日本人建築家の中国講演会のコーディネーターを務めている。これまでに伊東豊雄、古市徹雄、山本理顕、古谷誠章、妹島和世、隈研吾、青木淳、大野勝（佐藤総合計画）、陸鐘驍（日建設計）の各氏に講演をお願いした。今年は昆明理工大学での大会で西澤立衛氏に講演をお願いしたが、アイドルスター並みの人気でサインを求める学生の列は果てしなく続いた。

建築設計の世界では経験則がとても大切である。「こんな設計をすると竣工後にこういったトラブルが起きるから、設計段階でその問題をこう解決すべきだ……」といった経験則や、「このデザインは斬新だが実際には施工がこのように困難で、その結果、施工品質はこのように落ち、それがデザインをこのように損なう。だからデザイン段階でこのように改善したほうが良い……」といった経験に基づくトラブル防止などを初期設計にフィードバックすることはとても大切だと思う。これはベテランをしてはじめてできるとであり、シニアが活躍できる場でもある。

現在の日本には定年を過ぎたシニアの設計者が大勢いて、あたかも人材倉庫の様相である。私がなぜこのようなことを言うかという、中国の設計界にはほとんどシニアのベテランが居ないからだ。私が定年後10年以上、大した能力もないのに中国で仕事を続けてこられたのも、シニア中国人の対抗馬が居なかったからである。

これには色々原因があるが、一番大きな原因は文化大革命（文革）である。1966年にはじまった文革は1977年まで続き、その間中国での高等教育は機能停止し大学は閉鎖された。文革では学生、教員、設計者など都市部の青年やインテリを“下放”といって地方の農村に強制的に送り、そこで農民との格差を解消するために彼らに単純労働を強いた。文革前の最後の学卒者は私と同じ1943（昭和18）年生まれまでであるが、ほとんど人が下放にあっている。1977年に大学は再開されたがその後4年間は学卒者がいないから、1981年までの都合15年間、中国では学卒者がいなかったことになる。

文革で大学に入れなかった中国の我々の次の世代はさらに不幸で、学習意欲のある若い時代にそのチャンスを奪われ、大学が再開しても入学できなかった人たちは、能力があってもタクシーの運転手のような仕事にしか就くことができず、不遇の人生を送る運命を甘受させられた。

もしこの不遇な世代が大学に行けていたら、現在の中国設計界には60歳代のベテランが大勢いただろう。また、文革の11年がなく、建築設計の仕事も継続していたら、やはり設計界のベテランを大勢輩出して、今でもシニアの設計者が大勢活躍していただろう。現在の中国設計界で活躍しているのは文革後の世代で、年齢的には50歳代以下である。

中国での男性定年は一般的に60歳である。定年後になぜ仕事を続けないのかと聞くと、「いまさら文革後の世代に頼でこき使われるのはかなわない……」と言う返事が返ってくる。実際に中国の設計事務所ではシニアを見かけない。設



大連のオフィスビル計画



東京芸大の片山教授と福建省土樓調査



清華大学での講演。通訳は阪和興業の米原氏

計関係者の宴会などでは、ほとんどの場合私が最長老になる。日本ではまだグランドシニアのヒヨコでいつも末席なのに。

### 実務から得た建築の知識と経験こそが価値を持つ

鄧小平の改革開放以来、中国は国家としての体裁を整えるため、急速に都市建設を進めて来たが、経験者不足、技術力不足に加えて拝金主義や賄賂社会の影響も手伝い、とくに1990年代以降の建築の設計品質や施工品質は極めて悪い。遠目にはカッコいいが、近づいてみると粗が目につく。また、竣工後に建物のメンテナンスをほとんどしないから、建物の老朽化も急速に進み、近年までに建設された建築物の耐久年数は、おそらく日本の半分以下だろう。

これは中国国家にとって大変な損失である。老朽化建物を取り壊しても、中国では建設廃材の捨て場がなくなってきている。新たに建設すればそれだけ環境破壊も進む。中国ではデベロッパーがイニシャルコストでしか設計案を評価しないが、今後はライフサイクルコストを考え、サステイナブルな建築を目指す以外に道はない。求められるなら日本のシニア設計者が活躍できる場はたくさんある。今は日中政府間がギクシャクしていて設計者の交流がないが、中国の建築界は日本の実務経験豊かなシニアを実は必要としている。近い将来お呼びのかかる日が来るかもしれない。

中国が必要としているもう1つの大切なことは人材の育成

である。日本の組織設計では入社以後約10年間、さまざまな形で職員の技術教育を行っている。まだ日本での雇用は終身雇用がベースだから、技術教育に投資しても会社には十分な見返りが見込める。一方、中国では終身雇用ベースは役人くらいで、民間の設計事務所では職員が簡単に辞めるし、経営者も長く雇用すると終身雇用にする義務が生じるから、適当な理由を付けて必要ない職員が早く転職するように促したりしている。大学卒業時の知識や向学心は中国の方が日本より高いと思うが、入社10年後では、日本の方が高い技術力と総合的知識を身につけている。

また、日本では「施主折衝」→「計画設計」→「基本設計」→「申請」→「実施設計」→「設計監理」と、建築設計を一気通貫で経験させるOJT（On The Job Training）がこれまで主流だったが、中国では設計者は基本設計までして、実施設計や設計・監理は他の人に引継ぐのが一般的であるから、設計者が施工に関する知識や経験をあまり持っていない。さらに、ある程度経験を積むと多くの人が独立し、経営者となってやがては拝金主義に染まる人も多いから、仕事一筋に円熟した技術力を蓄えたエキスパートやベテラン仕事師は中々育たない。これも中国で定年後に設計で活躍するような経験豊富なシニアがいない原因であろう。中国の大学で私が講義するとき求められることは、デザイン論のような「能書き」ではなく、実務経験に基づく話をするのである。ところ変わればシニアの出番はまだまだあるものだ。（了）



上海同済大学での妹島和世氏講演会。3000人が集まり会場から溢れた



昆明理工大で気さくにサインする西澤立衛氏